

世界初、人工雪の完成

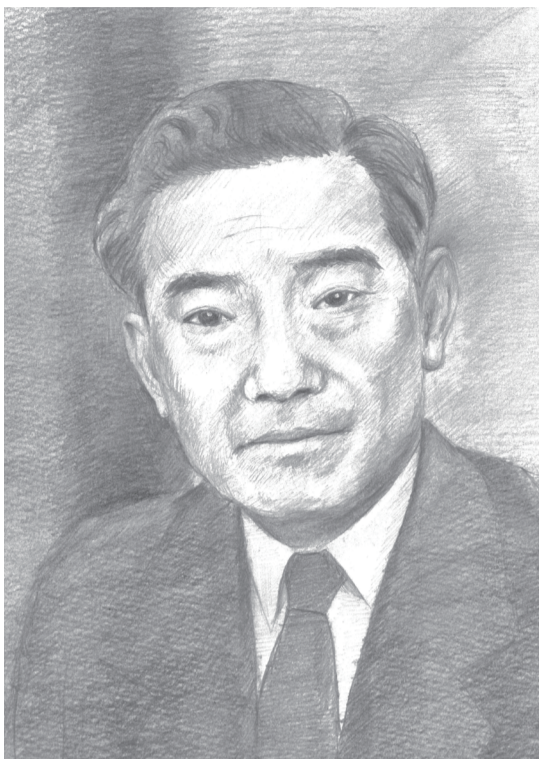
石川県にゆかりのある人物
(向学新聞2012年3月号に掲載した人物伝を再掲載します)

現代日本の源流 世界を見た日本人

再掲載—中谷 宇吉郎



科学と美は切り離すことはできない。中谷宇吉郎の言葉である。雪の結晶の美に感動し、それに魅せられたがゆえに、病弱の身を押し、雪と氷の研究を続けることができたのである。世界初の人工雪の製作に成功した彼は、世界の雪氷研究を常にリードし、低温科学の分野で大きな業績を残した。



自然の美に驚く心

中谷宇吉郎は雪と氷の研究に生涯を捧げ、世界の雪氷研究をリードし続けた学者である。そればかりではなく、数多くの随筆を書き残していた。「雪は天から送られた手紙

である」という詩的な言葉は広く知られている。雪の結晶を研究すれば、雪が辿ってきた大気の状態を推測できるということなのである。彼の研究を支え続けてきたものは、自然の美に驚く心であった。雪の結晶の美に

すっかり魅せられていたのである。中谷が生まれたのは、1900年7月4日、石川県江沼郡作見村の片山津(現在は加賀市)という温泉地である。北陸のこの雪国に生まれなければ、後の「雪の科学者」中谷

宇吉郎は誕生しなかったかもしれない。両親の仕事は、呉服と雑貨を扱う商店。7歳の時、宇吉郎は大聖寺(片山津から遠い)にある錦城小学校に入学するため、親戚の家に預けられることになった。その家のお婆さんは、毎日仏壇にお経をあげてくれた。日課としていた。それに付き合わされた宇吉郎は、薄暗い仏間でロウソクの光に揺らめく金色の仏像の姿をぼんやりと眺めながら、宇宙創成を思い描いていた。ロウソクの光が読経の声と重なり合い、やがてエネルギー

の渦巻きが、速度を上げて回転し始める。その中心から、ほの白いガス状の物質が誕生する。この頃から、宇宙の神秘に思いを向ける癖が付いたと彼は語っている。寺田寅彦との出会い

金沢にある旧制高校(四高)から東京帝大理学部物理学科に進学した宇吉郎は、そこで寺田寅彦教授と運命の出会いをする。この出会いこそが、科学者としての中谷宇吉郎の出発点となった。大学卒業後、理学部研究所に入ったのも、そこに寺田がいたからであった。飽くなき好奇心、科学者としての姿勢、生き方など多くを寺田寅彦から学んだ。寺田の口癖は、「ねえ君、不思議だとは思いませんか?」

「だいたいいろいろ自然の神秘を前にして、素直に驚く宇吉郎の感性は、寺田から受け継いだものだった。寺田はこうも言った。「一番大切なことは、役に立つことだよ」。宇吉郎がその随筆で、「科学とは何だろ

うか。人間の幸福に役立つものだと思う」と繰り返している。こんな彼の科学観もまた、寺田から学んだものなのである。多数の随筆を残したのも、文筆家としてならした寺田の影響であったことは間違いない。

雪の結晶の美
宇吉郎の当初の研究対象は雪ではなかった。イギリスのキングスカレッジ大学に2年間留学し、そこでエックス線の研究に取り組んでいた。雪を研究対象としたのは、帰国後、北海道大学理学部助教として北海道での生活を始めたからであった。北海道の寒い冬が近づき、雪がちらつき始めた頃のこと。「そろそろ雪の研究でもしてみようか」と思い立ち、手始めに雪の結晶の顕微鏡写真を取ってみようと考えたのである。

彼がこんな風に思ったのは、アメリカの写真家ベントレーが撮った雪の結晶写真の美しさに見とれていたから

であった。日本の雪の結晶はどうなっているのか。それを調査したい衝動に襲われたのである。1932年の暮、32歳の時であった。雪の結晶写真を撮ると言っても簡単なことではない。暖房の効いた研究室では雪はすぐ溶けてしまふ。零下5度以下の環境でないと良い写真は撮れない。宇吉郎は、人がめつたに通らない付属室に行く廊下の隅っこに実験台を設け、そこに顕微鏡を運んだ。冷え切ったガラス板を外に出し、降り落ちる雪をそっと受けとめる。それを顕微鏡で覗くのである。

この3月に卒業を迎えた留学生のために、指導教員と在学生在が集まり、卒業を祝う壮行会を開催しました

指導教員からは「はなむけ」の言葉が、在在学生から立派に卒業した先輩達に対して尊敬の念を込めた言葉が送られました。卒業生は達成感や感謝の言葉を述べていました。

日本で学ぶ際にはとても大変だと感じた日本語でしたが、今日の日本語はとてもキレイだと感じたそうです。



東京電機大学

<お問合せ> 国際センター TEL:03-5284-5208

E-mail: tdu-inter@dendai.ac.jp HP: https://www.dendai.ac.jp/

(東京千住キャンパス) JR線/東京メトロほか 北千住駅 (埼玉鳩山キャンパス) 東武東上線 高坂駅・北坂戸駅

